

# Freude

vol.14 -24 2018. 8.22. wed

え!?  
もう8月も終わるやん

大阪フロイデ合唱団 Tel 06-6358-2626  
〒530-0041 大阪市北区天神橋2-1-18-4B  
ホームページ <http://www.osakafreude.com>  
メールアドレス [info@osakafreude.com](mailto:info@osakafreude.com)

## クレドミサもろもろ

ネット見てたら、クレドミサについて、いろいろ見つけました(^\_^)

■Dr.町田さんHPより抜粋（すごい長いのを抜粋。発信者の主観もあってオモシロイです）

K257は当時としてはおそらく破天荒なミサ曲であったと思われる。レシタティーボのようなキリエの合唱の入り、グロリアのロマン派風の入り、CredoCredoと何度も繰り返すクレド等々、K257はモーツァルト彼がいろいろな工夫を試みていることがわかる。そうした工夫は後のミサ曲やオペラなどで花開くのであるが、このミサ曲においてはまだそのための過渡期的段階といえよう。モーツァルト研究の泰斗アインシュタインはこのミサ曲を「リートミサ」と呼んでいる。ソロを含めて複雑なパッセージがなく、全体が流れるようなやさしい雰囲気を持っているからであろう。

このミサ曲は1776年の11月に書かれている。「大クレドミサ」というあだ名がついている所以はいうまでもなく、このミサ曲のクレドが非常に特徴的であるからである。「小」も無論ある。K192がそれである。このミサ曲もまたクレドにおいて「Credo」が何度も繰り返されており、K257より規模が小さいので「小クレドミサ」と呼ばれている。

（以下、各曲の特徴より抜粋）・Gloria では、Et in terra に入ると、型どおり、terra(地)に合わせたように合唱は低音域を這うようになる。

・Credo. Credo,Credo,と合唱がけたたましく叫ぶ。とにかくよくそここまで”Credo”を嵌め込んだものと思う。こんなミサ曲は、それまでまずなかったはずで、初めて聴いた人は、度肝を抜かれたのではないか。モーツァルトは、この曲で何らかの実験をしていたのではないか。或いは、よほど自分の信仰をやたら誇示したかったのか。しかしこの楽章は、こんなふざけたことをしている割には、名曲なのであり、そこがモーツァルトのすごいところだと思う。

この楽章は、大雑把に言えば、Et incarnatus est de Spiritu Sancto 以下の緩徐楽章を挟むABA'の三部形式であるが、特に間のBの部分は素晴らしい。このBの緩徐部分で不思議

(ウラに驚く)



8/29(水)  
18:30~  
堀江PPT

9/5(水)  
18:30~  
堀江PPT

9/12(水)  
18:30~  
堀江PPT

9/19(水)  
18:30~  
堀江PPT

議なのが、*et homo factus est*(人となり)の部分である。すなわち、この部分ではアクセントが意識的にずらされている。さらに不思議なのは、音楽的アクセントのみならず、*et homo factus est*のように、歌詞のアクセントまでずらされているのである。この意図は不明である。(※Credo 97~98小節部分。ソロの四重唱です)

後半部分の聴きどころは、*Et in Spiritum sancum~qui locutus est per Prophetas*までのソロカルテット部分で、バスが主導して、ソロカルテット(一部 Tutti)がフォローするという形になっている。この部分は、オーケストラも素晴らしい。

最後は、”Credo”と”Amen”が混在して終わる。このCredoは、K257の中では、一番の名曲だと思う。

・Sanctusの最初は、かの有名な「ジュピター音型」である。(「ド・レ・ファ・ミ」の音型)

#### ■柴田治三郎編訳 「モーツァルトの手紙」 岩波文庫 1980

(モーツァルトが1776年9月4日にボローニャのマルティーニ神父に宛てて)

我々の教会音楽はイタリアのそれとは大層異なっておりまして、キューリエ、グローリア、クレド、教会ソナタ、オッフエルトーリオあるいはモテットなりサンクトゥス、およびアニュス・デイをすべて具えたミサ、さらにもっとも荘厳なミサよりもつねに長いのでありますが、そのミサを君主お自身が唱えられます時には、45分以上かかってはいけないうことになっています。この種の作曲のためには、特別の研究が必要であります。それにしましても、それはすべての楽器(戦闘用のトランペット、ティンパニ等も)を用いたミサにならなければなりません。

#### ■カルル・ド・ニ 「モーツァルトの宗教音楽」 相良憲昭訳、白水社 1989

日ごろ彼が意を注いでいる音楽の機能的な理想を実現するために、曲を短くそして密度を高めるように努力を払っているのである。つまり極限にまで狭められた音楽空間のなかで、可能な限り豊かな表現をもつ音楽を作曲するようになったのである。

#### ■H.C.ロビンズ・ランドン 「モーツァルト」 石井宏訳、中央公論新社 2001

1770年代のモーツァルトは、意識的にポピュラーな教会音楽を書こうとしていた、という新説が出されている。つまり、彼の書いた大司教のための楽しいシンフォニーやディヴェルティメントやセレナードは、宮廷人や土地の貴族にしか聴いて貰えず、一般の人の耳には届かなかったからで、一般人に聴けるものといえば、ダンス音楽(モーツァルトはたくさん書いているが、何曲かは大変に美しい)か、教会音楽だけだった。ザルツブルク近郊の教会や高地オーストリア(首都はリンツ)の教会を調査した最近の研究では、ミサ曲K257、259、262、275のような1775年と76年の作品(275は次の夏の作品)群は、手書きの譜でこれら近隣の教会におびたしく流布されており、極めてポピュラーになっていたことが判った。実際のところ、ラント・ザルツブルクや高地オーストリアの多くの人々は、長年にわたって、モーツァルトの音楽といえば、これらの教会音楽しか知らなかったのである。これらの「ポピュラーな」ミサ曲の中で最も偉大な作品は、輝かしい『クレードー』ミサK257で、若さの活力と躍動するリズムにあふれ、最初から最後まで人をとらえて放さない。